

治療開始が遅れるほど死亡や後遺症のリスクが高まる脳卒中。時間との闘いといわれる急性期患者を24時間体制で受け入れ、集中治療に当たるのが「脳卒中ケアユニット（SCU）」だ。県内では福井市の県済生会病院、福井赤十字病院に組織され、ともに開設から10年が経過した。血栓溶解薬が使用可能な時間内に病院を訪れる患者はまだまだ少ないといい、「症状が疑われる場合は病院へ急いでほしい」と呼び掛ける。開業医など地域との連携も重要視している。（前田和也）

# 脳卒中急性期 集中治療10年

■薬剤の認可機に  
SCU開設のきっかけは、脳に詰まった血栓（血の塊）を溶かす薬剤「t-PA」の国内認可。当初は発症から3時間（現在は4・5時間）以内に使用する必要があり、迅速な治療を常に行える体制整備が求められた。

厚生労働省の基準は▽5年以上の経験を持つ神経内科医、脳神経外科医が常時いる▽患者3人に対し1人以上の看護師がいる▽専属の理学療法士または作業療法士がいるなどが条件。医師や看護師、リハビリスタッフらがチームを組んで急性期治療を施し、2週間以内一般病棟に移ってリハビリなどを行う。地域の開業医、県内の救急隊

員とSCUの医師は常時連絡がとれるようになっており、医師は病院到着までの間も状況に応じて指示を出す。

県済生会病院 ケアユニット 福井赤十字病院



県済生会病院のSCU入口

## 地域と連携、啓発に力



福井赤十字病院のSCUで治療に当たる医師ら

脳卒中 血管が詰まる脳梗塞と血管が破れる脳出血、血管の動脈瘤が破裂して起こるくも膜下出血の総称。がんや心臓病と並ぶ日本人の三大死因の一つで、一命を取り留めても後遺症が残りやすく、発症直後の治療が極めて重要。

■歩いて帰る■  
厚生省基準を満たすSCUを日本海側で初めて設けた県済生会病院は、この10年間で約3500人の脳卒中患者を治療してきた。脳卒中センターにあるSCUの病床は当初の6床から9床に増やし、延べ床面積も117平方メートルから209平方メートルに拡大した。

「脳卒中は怖くない！ 歩いて帰る！」をキャッチフレーズに、入院当日からリハビリを行う「超早期リハビリ」に力を入れてきた。センター立ち上げに携わった宇野英一副院長は「当初からリハビリも点滴、手術と同等の治療と位置付けた。365日休まずリハビリ指導を行う」とは画期的だったと振り返る。

脳卒中関連の認定看護師は3人。最新機器を使い、専任のスタッフが手厚くサポートする。薬剤師や栄養士も高度な知識を

■4・5時間以内は1割■  
福井赤十字病院は脳神経センター内に134平方メートル、9床を備え、年間約380人の患者を受け入れている。脳神経外科、神経内科の医師10人で当直体制をとおり、センターには脳卒中、嚥下障害、認知症分野の認定看護師が控える。患者の社会復帰を支援するソーシャルワーカーを交えたカンファレンスを毎日開き、情報共有している。

高野誠一郎・脳神経センター長は「t-PA投与後に行うカテーテルを使った血栓回収療法に力を入れている」と話す。早瀬睦・脳神経外科部長は「発症後8時間を超えてから来る人がほとんどで、4・5時間以内の治療開始できる人は約1割しかない。発症から病院到着までの時間を短くすることが何より大事」と強調する。早急なt-PA投与の啓発とともに、地域の開業医や救急隊員、高齢者の同居家族向けの研修や講座も充実していくとしている。